子どもの本を選ぶ
●絵本と出会う前に ●はじめての本との出会いとは ●DM かたろぐ
No.112（2019 年 8 月 20 日）／発行 ライブラリー・アド・サービス
本社（〒 335-0004）埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL048-432-3726
https://www.las2005.com

絵本と出会う前に

吉田 優子

子どもの頃のことです。幼稚園や小学校から帰って友達と遊びたいとき、出かけて行って、門の外から「〇～ちゃん、あそぼ」と声をかけると、家の中から「は～い」の返事が聞こえます。どちらも特に意識することなく、自然に節をつけているのです。そして、園庭や校庭で大勢で遊びたいとき、「〇〇するもの、よっといで～」とこれまた節をつけて人差し指をたてて呼びかけると、みんなが走ってきて人差し指につかまります。友達を呼ぶとき何かしたいとき、「〇〇ちゃん」「〇〇しよう」ではなく、その言葉には大抵節がついていました。

そして、我が子が産まれたときも、「〇～ちゃん」「こんにちは～」と節をつけて語りかけました。朝起きたときには「お・は・よ」おむつ替えも「きれいきれいしましょう～ね」と声掛けしていました。思い返せば、子どもへの語り掛けにはいつも節がついていました。子どもがこちらの語り掛けに「うーうーうー」「こー」と答えてくれるようになって、それに「うーうーうー」「こー」と同じように返すときにも、足元からの日向ぼっこ（今はしないように指導されているようですが）を始めたときにも「きもちいいですね～」、乳母車で散歩するときにも「おさんぽいきましょうね～」「おでかけですよ～」と、節を付けて語り掛けていました。

語り掛ける私の目をまっすぐ見て、いろいろな声を出してくれるようになると、「あばばば～」「ぶるるる～」「れろれろれろ」の口を動かしてみせる遊び、「にぎにぎにぎ」「いないいないばあ」「おつむてんてん」「あーがりめ　さーがりめ」「かいぐりかいぐり」「ぐーぱ　ぐーぱ」と手を使う遊び、親が孫相手にしている遊びを見ていて覚えて遊びました。子どもがキャッキャッと声をたてて喜んでいるのを見て真似をしていました。

私にとって、子どもの頃の友だちとの呼びかけも我が子への語り掛けや遊びも“わらべうた”という名の付く特別なものではなく、衣食住の中に当然あるもので、いわばご飯とみそ汁と同じ普段の生活そのものでした。

ところが、文庫を始めてしばらく経った頃、“絵本とわらべうた”の会があることを聞きつけ行ってみると、なんとも心地よい楽しい場でした。それから毎月一回開催されているその会へ出かけ、大勢の親子に交じって楽しみました。わらべうたの講座も受けました。そして、母や私がしていた乳幼児期の子どもとの会話や遊びもわらべうたなのだということも学びました。それでも、公民館などでしている“絵本とわらべうた”の会はイベントのようなもので、親子で楽しいひとときを過ごしてもらう場であり、わらべうたで楽しんでもらって絵本に興味をもってもらうことを目的とする場であるという考えが勝っていました。

そのうち、自分でも公民館でそのような会を始めるようになったある日、一人の若いお母さんが「こんな小さい赤ちゃんと遊べるなんて思いもしませんでした。まだおっぱい飲んで泣いて寝ているだけなんですもの。楽しかった」と言ってきました。別のお母さんは「一日中この子と二人っきりでマンションの中にいると、全然しゃべらないし、時間が長く感じられてつらいから、ここへ来てみました。来てよかった、楽しかった」と言ってくれました。生後一か月二か月の赤ちゃんを連れたお母さんも来るようになりました。そこで、まずは親子で向かい合って声出し合う会話を通しての遊びを伝えた方がいいのでは、と思うようになりました。

子どもの心も親の心も和ませ落ち着かせてくれるわらべうたと出会えて良かった、と感じてくれたら嬉しいなと思います。そして、今度はいい絵本と出会って、親子で絵本を友だちに、穏やかな素敵なひとときを過ごしてくれるよう願っています。（よしだ ゆうこ）

はじめての本との出会いとは

～ボランティア活動のゆくえ～

手島 一恵

地元でボランティア活動を始めようとしたら

2019年３月をもって、職場を退職した。フルタイム勤務していた時も、児童図書館員としての経験を生かして、休暇を取ってボランティア活動を継続してきてはいたが、それまでのつながりもあり、その活動の中心は、職場のある自治体内であった。

そこで今後は、30年以上前から我が家の子ども達もお世話になった、自分の居住している地域を軸にして地元に貢献したいとの想いから、勇んで地元の図書館を訪問し、ボランティア活動の相談をしたのであるが、ことはそれほど簡単ではなかった。

私の住んでいる自治体内の図書館でボランティア活動をするためには、まず、２年おきに開催される、図書館主催の講座を受講しなければならないとのこと。今年がちょうど開催の年であるため、近々、募集するだろうとの話だったので、めでたく受講できたと仮定する。しかし受講したからといって、その後、自分の希望する地元の図書館でボランティア活動ができるとは限らないのだそうだ。あくまでも、今活動中のボランティア要員に空きが出た図書館での活動ができるとのことで、いつから開始できるかの保証はないとの話であった。

もちろん、これまでのボランティア活動のつながりを断って、地元以外での活動はしないということではないのだが、地元優先でと意気込んでいた分、なんとなく、肩すかしをくったような気持ちになった。

子育て世帯が増えた

というのも、私の住むマンション（200世帯）のある地域では、少し前まで、ほとんどの世帯が高齢世帯だった、という印象があるのだが、ここ数年の間に、乳幼児のいる子育て世帯が激増してきた印象なのである。平日の朝夕や休日の昼間、エレベータで乳幼児を連れた若いお父さん（が多い）やお母さんと乗り合わせることが多くなり、そのたびに、近い将来、この子達にわらべうたや楽しい絵本を届けられる機会が持てたらなあという気持ちが日に日に膨らんでいた毎日だったのである。

それと、ここ数年、電車やバスの中で、赤ちゃんがぐずると、一言も話しかけず、いきなり無言で、それまで自分が見ていたスマホを赤ちゃんに見せる、そんな若いお母さんの光景を見るにつけ、自分の中に、より幼い子ども達への働きかけを始めたいという、焦りのような気持ちがどんどん積もってきていることもあるのかもしれない。

「ブックスタート」事業

そんな中、私の中でしばらく前から引っかかっているのが、「子どもにとってのはじめての本との出会い＝ブックスタート？」についてである。

児童図書館員としての経験を生かし、学校・保育園・幼稚園でのお話会や大人向けの講座のボランティア活動をしてきた中で、個々のお子さんの選書のお手伝いをする機会もあるのだが、あるとき、その中の一人のお母さんに問われたことが、どうにもずっと引っかかってしまっているのだ。

そのお母さんは、私が勤務していた自治体

に在住しているのだが、長女が生まれて参加した「ブックスタート」事業で、図書館からもらったある絵本について、「この絵本が、本当に子どもにとってのはじめての絵本なのでしょうか?」と問われたのである。たしかに、そう問われると自信がない。この絵本よりも先に薦めたい絵本はあるのだ。

そのお母さんは、家庭でも子どもと絵本の時間をとても楽しんでいて、「ブックスタート事業の意義っていうのも、もちろんわかるんですけどね・・・。」と付け加えた。

たしかに私も、日本では、2000年の「こども読書年」をきっかけに、各地で取り組みが始まり、2001年4月にNPOブックスタートが商標登録している名称としての事業「ブックスタート」が始まったことで、多くの自治体がこのNPOブックスタートを利用している現状があることは知っていた。そのお母さんが参加した自治体もNPOブックスタートを利用しており、もらったその絵本は、NPOブックスタートが公表しているリスト「ブックスタート赤ちゃん絵本」の中の1冊であった。

「はじめての絵本」とは

先日、初めて、この自治体の図書館でのブックスタート事業の現場を見学させてもらい、主催している図書館の担当者に話を聞くことができた。親子(そのときの赤ちゃんは4ヶ月)に読み聞かせる様子は、とても表現力豊かで、声を変えたりして、私がお話会でやっているものとは大きく違っていた。読んだ絵本についての説明も、「どのページからでも読み始められるようにできている絵本で、原色を使って色がくっきりしているので、赤ちゃんにもとてもわかりやすいですね。」とのことだった。読み通す必要はないし、赤ちゃんが絵本をいろいろに扱っても、叱ったりせずに見守ってほしいと、両親に説明していた。

ここで読まれる「はじめての絵本」は、いわゆる、親と子の橋渡しをする「道具」のような存在なのだろうか? それがどうしても「絵本」である必要があるのか? いや、「ブック」「スタート」なのだから、本でなければならないか。

いただいたブックスタートのパンフレットには、「ブックスタートとは、赤ちゃんが心健やかに育つよう、絵本を通じて親子が心を通わせることの喜びや、読み聞かせの大切さをお伝えする取り組みのことです」と書かれていて、そのこと自体はもちろん、その通りだと思うのだが、言うは易く、行うは・・・。

自分には何ができるのか

ある1冊の絵本が「はじめての絵本」にふさわしいかどうかを見極めるのは、とても難しいことであり、もちろん、一人ひとりの赤ちゃんによって違う部分もあるのかもしれない。それが「事業」という形になったとき、選書をはじめ、いろいろな事情が複雑に絡んでいくことも事実なのだと思う。

この自治体では、「ブックスタート赤ちゃん絵本」リストの中の2冊を図書館が選書・購入し、対象者の赤ちゃん(1歳のお誕生日まで)全員に無料配布している。ここ数年、この2冊はずっと同じ絵本であるとの話なので、その購入冊数はどれほどの数になるのだろうか。もちろん、図書館が毎年購入している夏の課題図書の購入数の比ではない程、多数になるだろう。

このブックスタート事業を、このあとどうフォローしていけば、赤ちゃん達はこのさき、「かあさんねずみがおかゆをつくった」、「100まんびきのねこ」、「サリーのこけももつみ」といった絵本達を楽しめる子どもになっていけるのか。わらべうたを届けていくということも含め、これからの私にはどんな活動ができるのか、できないのか。悩める日々は続いていくのでした。(つづく)

(てしま かずえ:子どもと本のボランティア)